

## 討 論

【司会 堀田慎一郎（大学文書資料室員）、以下、司会】 まず、お寄せいただいたご質問の中で、個別的なものから始めて、最後に全体的な討論に入りたいと思います。

最初は寺崎先生へのご質問です。これは寺崎先生だけではなく、吉川先生や他のコメンテーターの方々にもということですが、学術史、部局史をまとめる際のヒントを教えてくださいということ。学術が非常に細分化する中で、同じ学部分野の分野においてすら理解が及ばないような状況が出てきている。全体像がなかなか描き出せなくなっている。そういう中で、部局史や学術史をまとめていくのは非常に難しくなっているのではないか。それをどのようにまとめていけばいいのか」というご質問です。なかなか難しいご質問かと思いますが、寺崎先生、お願いします。

【寺崎昌男氏、以下、寺崎】 ものすごく難しいことです。例えば部局の歴史を書くときに、東京大学の文学部の例が一番すごい例でしたが、一つの学部の中に学科が確か一八ありました。そうすると、「うちは何しろ一八の学部を持つ学部ですから、まとまらないのです」と学部長すら冗談を言われるのです。そういうところで、「どうぞ講座でお書きください」「学科でお書きください」と言うと、それだけの数の部局史が並び、誰がいた、どういう研究をした、こういう賞を受けたということが書かれ、その累積が学部の歴史になるという問題があります。そういうところほど逆に、間に立つ、それをまとめる先生がしっかりしていないと、全学的動向の中で、うちの学部はど

ういう位置にあつたかが書かれないことがあるわけで、それも非常に問題が多いのです。そこを克服するにはどうしたらよいかという問題です。

一つは、全体の委員長が遠慮なく注文を出せるようにしておくことだと思います。これは初めから、そういう空気をつくつておくことだと思います。ですから、全体のキャップになる方の役割が非常に大きいと思います。例えば「理学部の場合、このときの、この改革が大きかったと聞いておりますが、お出しになったものの中には、ここが入っておりません。そこをもうちよつと強めていただけませんか」ぐらいのことは言える体制をつくらないと駄目だと思います。

東京大学百年史編集室では百年史の稿本を作りましたが、それをまとめるのにどうしたかという、当時はワープロはありませんから、稿本の原稿は全部手書き原稿で出されたのです。その手書き原稿をそのまま見て直すわけにいきませんから、いったんタイプ印刷の原稿にして検討するわけです。その検討作業をするときに、私たちは最初に編集室独自で申し合わせをしました。それは、原著者は、この著作に関しては著作権を主張しない、ということです。原稿の保存はする。しかし、著作権を言わない。これを約束しておく、大権威が出してきた原稿を真っ赤に直すことができます。

その直す作業の際も、後ろに最高の委員長がいることが大事でした。何か問題が起きたときに、後ろがないと決めるときに怖いのです。後ろがあると、最後は後ろが責任を取ればいいので、思い切ったことが言えます。ところが、後ろがなくてやっている、前線が駄目になったときには、本当に全部駄目になるわけです。

やる人は、一人は大学史の専門家、一人は近代史の専門家、もう一人が校訂を中心に行っているプロフェッショナルな人でした。史料編纂所で長年アルバイトをやっておられた女性のベテランの校訂者です。その三人だけがや

ることにしました。つまり、「おれが出した原稿も、ここが変わっているけれど、これは誰の意見で変わったのだ」というのが分からないようにしたわけです。その三人の委員会は、完全にコンフィデンシャルで開きました。だから、途中で彼らが何を考えているか、誰も知りませんでした。仕方がない、それでやるしかないのです。そのために、私は法学部長のところへ行き、「すみませんが、おたくがずっと使っておられる安田講堂の物置のあの部屋を使わせていただけませんか。秘密の仕事をわれわれはやりたいのです」と頼み込んで、空けてもらいました。これはとても大事なことでした。

どうかすると、口を出せないような原稿を出してこられる権威がおられます。だから、それを制約するシステムを作ることは、ものすごく大事だと思いました。それをやったので、私は委員長でしたが、委員長が書いた原稿も例外ではありません。私の出した原稿も、真つ赤に直されたものが印刷所に行き、私は校正刷りを見ただけです。元の原稿は私のところへ返ってきてはいませんが、きちんと置いてあると聞きます。この元稿を私は書きましたとは言えますが、直し方については、私は関係していないし、権利は主張しないということで終わりました。証拠は残すが、権利は主張しないというやり方でした。

【瀬戸口龍一氏、以下、瀬戸口】 この問題は、私立大学と国立大学では大きな違いがあると思います。まず、部局史の問題についてですが、私立大学でそういった形で沿革史を作ることとはあまりありません。もちろん各学部が独自に作る場合は多々あります。学校としての成り立ち方が国立、特に旧帝大と私立では大きく違うからです。学術史について言うと、専修大学は経済・法律の専門学校として誕生するわけですが、私立学校で教えていた経済学がどのような学術成果を出したのか、法律学がどのような成果を出したのかという検証は行う必要があると思います。

例えば法律学校としての専修大学は英米法を中心に教えています。明治大学はフランス法、獨協大学はドイツ法を教えています。当時の社会状況と求められた法律学の種類にはどのような意味があったのか。そして各学校で教えていた法律学はどのように社会に還元されていったのかという検証は当然必要でしょう。なぜならそれが各学校の特色になっていったと思つてゐるからです。ですから、私立大学でも学術史については考えていく必要性はあると考えています。

ただ、戦後になると、各教員がどのような学術成果を、どのような経緯で挙げていったのかということを考えると、これまた私立大学ではなかなか難しいわけですね。例えば専修大学の教員の多くは東京大学や一橋大学など他大学の出身者です。彼らを持つ知識のバックボーンは出身大学で養われたものです。その教員が挙げた学術成果は専修大学に勤めた結果なのか、それとも出身大学における研鑽の結果なのか、そういった点を検証することは大変難しい。学術史を考えていく際に、そういった点を、私立大学が今後どのように考えていくのが大きな課題ではないでしょうか。

【吉川卓治氏、以下、吉川】『名古屋大学五十年史』の部局史がどのように作られたかをお話しします。私は助手として編集室に入った時点では、幸い、既に刊行されてきました。その前年に出ていたので。ただ、苦労話は聞かせていただきました。原稿を各部局の担当者に催促するために、江藤編集委員長と助手の勝山さんが毎日のように各部局を回り、出してもらつたという、本当に苦労したという話しか聞いていません。

部局史は、名古屋大学の場合はほとんど丸投げで、出てきたものに対して何かコメントを付けることは全くしていません。その大きな理由は、式典に間に合わせなければいけないので、とやかく言えない状況であつ

たのだろうと推測しています。

確か西山さんが、大学沿革史全般の動向として、むしろ部局史から始まって、だんだん通史の部分が増えてきている傾向があるのではないかとというようなことをどこかで書いていたような気がします。その傾向からしても、部局史が作られていくのは、今後、国立大学でもかなり厳しいと思つたりします。けれども、学術史の観点からすると、部局史は外せないと思つています。

では、それをどのように書くかということに関しては、本当に何の知恵もないのですが、編集の実務に関わるスタッフが、寺崎先生のお話だと、壁を乗り越えてあげずけ物と言うことだと思ひますが、それを言えるだけの裏付けのある専門性のあるスタッフが関わつていく。しかも、分野は非常にたくさんありますから、量的な面である程度確保できるような体制をつくるのが重要かと思ひます。それぐらいしか今は思ひつきません。

【司会】 私の進め方が悪かつたのですが、複数の方に質問するような幅広いテーマは、後でまとめてすることにします。まずは個別の質問を一通り受け付けたいと思ひます。

寺崎先生に聞きたい方がおられましたらお願いいたします。

では、瀬戸口さんに聞きたい方がおられましたらお願いいたします。

質問用紙に瀬戸口さんへの質問があつたので、ご紹介します。まず一つ目は、「なぜ『八十年小史』が最初だったのか。その事情が知りたい」ということ。もう一つは、「大学が持つビジョンとの連携が必要だということですが、それは将来像に寄り添うという意味なのか。大学史はビジョンにこそ影響を与えるべきではないかと個人的には思ふのですが」というご質問です。

【瀬戸口】 最初の質問である『八十年小史』をなぜこの時期に出したのかという点ですが、それ以前の創立五〇年の時にも、また七〇年の時にも作っています。ただ、それは小冊子としてで、本格的な写真集としては『八十年小史』が最初になります。この時期はちょうど専修大学が学部を増やしていく時期と重なります。もともと専修大学は経済学部と法学部だけでスタートしたのですが、昭和三〇年代後半から経営学部・商学部・文学部と次々に新学部を設置し、定員数も大幅に増やしていきます。現在のような形に変わるきっかけとなった時期でもあったわけですから、そこで大学としても宣伝に力を入れるようになり、その一環として本格的な記念誌が作られていくようになったと言えます。戦前までの専修大学は本当に小さな大学で、学生数も非常に少なかったのです。まさに『八十年小史』を作った時期から高度経済成長の波に乗って大学が生まれ変わっていったのです。

もう一つ、ビジョンの問題については、ご質問者のおっしゃる通りだと思います。どちらが先という問題ではありません。うまく相互に絡み合えばそれにこしたことはありません。将来像に寄り添うのが良いのか、大学史がビジョンに影響を与えるのが良いのか、これはある意味、どちらになるのかは各大学のスタンスではないかと思えます。ただこれも一つの在り方の問題ですが、専修大学のアーカイブズを担う大学史資料課は法人組織に属していません。大学によっては教学組織に属している場合もあるでしょうが、どうしても私立学校の法人側の意識としては創立者の顕彰であるとか、中興の祖の賛美といった点に力を入がちになってしまいう傾向が高いという点はあるでしょう。私個人としては戦争の問題や学生運動の問題などについても扱いたいと思いつつも、上の方から「それはちよつと」ということを言われることもあります。

ですから専修大学大学史資料課としては、どんな時代でもどんな内容でも資料はきちんと集める。しかし表に出

してはいけないと言われているものについてはそれを遵守し、出せる時期がくるまで課内で保存・管理しておくということを中心掛けています。ビジョンの問題についても、大学が示すビジョンに対して、アーカイブズが応えられることについては出来るだけ対処しようと考えています。法人組織の一員である以上は、その方針に出来るだけ沿うようにしていかなければならないとも思っていますが、単なる顕彰にならないようにも気を付けています。

【寺崎】 先ほどの問題に少し付け加えます。学術研究の歴史と大学の歴史とをどうつなぐかという問題です。先ほど申した教育史学会のシンポジウムのときに、ドイツの学者がベルリン大学の歴史を書いたもので、日本語に訳されたものを見せていただいたのですが、感心しました。

例えば第二次世界大戦後のこの時期には、こういう動向が学会に起きたということが、ベルリン大学をベースとして、結構、遠慮なく書かれているのです。これが違うと思いました。われわれだと、他の分野に手を出して書くとは全然間違ったことを書くのではないかと、そうすると袋だたきに遭って全部駄目になるのではないかと思つてしまいますが、それが無いようで、間違つてもいいという雰囲気、踏み込まれた側にもあるらしい。日本が一三〇年間にくり上げてきた狭い専門意識、侵入者を許さないという雰囲気、これはイギリスにおられた森嶋通夫さんという経済学者が書いておられますが、日本の学界には踏み込むことも遠慮するし、踏み込んできた者も許さないという雰囲気があるのではないかと、それを克服するには、どうしたらよいかということです。

科学史の人たちは大学のことを科学乗り物、つまり大学は科学が乗っている車だと言っています。初めはすごく違和感がありました。乗り物のように、すぐ降りられるようなものではないだろう、ちよつと違うのではないかと思つたのですが、今から思えばヒントにはなるのです。言い換えると、大学史をやるときに、各時代の学術研究者を

生み出す基盤・環境としての大学の歴史をどう捉えたらよいか、というテーマが重要になってくると思われる。その二つの関係を見ていくことがまず第一だと思えます。

私にその意識を与えてくれたのは、東京大学の百年史をやっているときの地震研究所の発生に関する記述でした。地震研究所の発生のころを調べていると、当時の地震学者たちの反論が記録としていろいろ出てきたのです。その記録に、例えばこういうのがあるわけです。地震研究所は、英語で言うと「Earthquake Research Institute」、その次に「at University of Tokyo」と来るのか、あるいは「for University of Tokyo」と来るのかという問題があるわけです。東京大学は、東京大学のためにある附置研究所と考えてほしいので「for」と言ってみよう。せいぜい「of」がいい。「of」は自分のところに属している「attached」という意味ですから。これに対して、地震研究所の仲間たちは大いに反発し、「at University of Tokyo」とやってくれと主張したそうです。なぜなら、地震研究は関東大震災以来、全世界的につながりをもって進展している学問である。それをやる場所はどこでも構わない。今われわれはたまたま東京大学に置かれようとしているだけである、という考え方です。こういう悶着があつて、最後は「of」になりました（現在は Earthquake Research Institute, The University of Tokyo です）。

そのような議論は、乗り物と乗っている者との関係に関わる議論で、ものすごく大事なポイントです。そのようなことがいろいろなところにあるのではないか。見下げられていたころの教育学部のことをもっと書けばよかったです。それは残念ながら、今の部局史の構成では非常に書けなかつた部分でした。しかし、これから書いていくべきだと思います。

【司会】 次に、吉川先生へのご質問はありますか。

【奥野正幸氏、以下、奥野】 金沢大学の奥野です。資料館の館長をしています。五十年史のころはあまりポイントがなかったのかもれませんが、大学史を作るにあたり、女性を中心とした観点について、現在は重要な点になると思うのですが、どのようにお考えかをお聞きしたいと思います。

【吉川】 女性への視点ということですね。五十年史だと、私が関わった通史で女性の話が出てくるのは、敗戦後に旧制の第八高等学校に女性の入学者があつたとか、岡崎高等師範学校に初めて女性の入学者が入つたとか、要するに新制に入る前の敗戦直後の旧制への入学者を意識的に扱った記憶があります。ただ、項や節としての大きな扱いではなく、その時期の特徴的な事項として取り上げました。

戦前に関しては、ほとんど取り上げられていません。ただ、医学校の附設の看護婦養成所や産婆養成所の制度を、通史の最後のぎりぎりの段階で慌てて入れた記憶があります。必ずしも意識して入れた記憶はないですが、今日からすると、そういうところをきちんと押さえることが必要だつたと思います。特に戦後のところは、もう少し書けたのではないかというような気がします。

【司会】 他に、吉川さんに対するご質問は。

【A氏】 Aと申します。「二『百年史』を展望する」で述べられている自治体史との関わりというところで、具体的に大学の歴史編纂と自治体史との関わりでどういったことを想定されているのか。

もう一つは、これまでの自治体史では、内閣府が持っているアーカイブがどれぐらい活用されているのか。この二点について教えていただきたいと思います。

【吉川】自治体史との関わりですが、自治体史の中で大学に関することが大きく扱われているのではないのでしょうかと思います。昔、全国の自治体の教育史を網羅的に調べたことがあるのですが、ほとんど個別の大学沿革史を縮小したものを並べておくパターンです。例えば名古屋だと、名古屋大学はこうで、次に名城大学、中京大学というように、個別の大学がぼんぼんと並んでいる形で終わるのがほとんどだと思います。それだと自治体史にはならないと思い、今、名古屋市で名古屋教育史を作っているのですが、高等教育を担当した部分に関しては、大学ごとで分けるのではなく、全部ごちゃ混ぜになるような形で書けないかということをやってみたりもしました。ですから、なかなかうまく反映していません。

それは多分、自治体史編纂の際に、大学のアーカイブをうまく利用して編纂する体制ができていないのではないかと思います。今から二〇年くらい前に名古屋で全史料協の大会があったときに、地域史料の連携というテーマだったので、大学史編纂と自治体史編纂とをうまく結び付けてやっていく必要があるのではないかという話をしたことがあります。その後、うまく結び付くようになったかどうかは、まだクエスチョンだと個人的には思っています。

【司会】他に、吉川さんへのご質問はいかがでしょうか。

【B氏】 今日のご説明の中で、名古屋大学の憲章のお話ですが、平和憲章が以前にできた話は聞いており、それについて大学当局にも意見を言ってきましたが、今日あらためて申し上げたいことは、大学の平和憲章を資料で読ませていただくと、物理教室の憲章との関連性があるようなご説明ですが、物理教室の憲章と平和憲章とは随分違うのではないかとことです。文章の内容を見ますと、どうも物理学をやった人の文章ではなくて、社会科学をやった人の文章ですので、その流れは違うのではないかと思います。

それから、現在、学術憲章がありますが、憲章が二つあるのはおかしくはないですか。学術憲章は綱領という名称にした方がいいと前にも申し上げたのですが、その辺のご見解はいかがででしょうか。

【吉川】 物理学教室憲章と平和憲章を一緒に入れたのは、大学自治という大きなくりの中で、一つのトピックとして出てくるということをお話しさせていただきました。

名古屋大学の学術憲章と平和憲章とは、大学がパブリックな形で出したものが学術憲章だと思っています。それに対して平和憲章は、大学の執行部と直接的には関わりはなく、大学の中で当時の構成員の発議によって作られた性格のもので、例えば評議会を経ていることはありません。両者は基本的な性格の違いがあると思っています。

【司会】 次に、西山さんへのご質問はいかがででしょうか。

質問用紙の方で「展示室の警備や保守の苦勞はありますか。例えば銅像。もう一つは、入場者数の推移と企画内容との間に連関は見いだせそうでしょうか」とあります。

【西山伸氏、以下、西山】 保守の苦勞はあります。銅像のことはともかくとして、むしろ、ご紹介した模型はいろいろとあります。ガラスも周囲を囲っているだけで、上は抜けていますので、触ろうと思えば触れるのです。上をふさいでしまうと、見る人から距離感がある。触ってほしくないけれど、指差して語り合つてほしい。いろいろ思い、結局、上にはガラスをかぶせなかつたのです。今までで一番大きい被害は、置いてあつた路面電車が盗まれたことです。きちんと接着剤で付けてあるのですが、どこかの中学か高校の生徒さんがたくさん来て、「いなくなつたら、なくなつていました」と後で報告を受けました。あれが一番大きな被害で、あとはそんなに大きな被害はありません。その対策も含めて、常駐していただく人を一人配置しています。その方に展示室全体の掃除を含めた簡単なメンテナンス、入場者数のカウント、万が一のときへの注意をしていただいたり、何かあつたときにこちらに連絡していただく。それから、簡単なレファレンス対応もありますので、展示内容に関することや歴史に関することなど、その場でお答えいただけることはお答えいただいて、手に余ることであれば文書館にご連絡いただくようにしていきます。

それから入場者数と企画との連関ですが、あるときとないときがあります。一九九六年に企画展のところで京都大学における学徒出陣という展示をしましたが、このときはたくさんお見えになりました。一月、二月は例年は人がとても少ないです。学徒出陣の展示は一月に打ちましたので、この年だけは、ばんと跳ね上がり、かなりのインパクトを与えたようです。ご承知のように、来年は戦後七〇年ですので、戦争あるいは戦後の京都大学ということで展示をしなければいけないと思つています。そのような企画を打てば、入場者数にかなり反映してくることはあります。今申し上げたのは一番典型的な例です。

【司会】 その他、西山さんへのご質問はいかがでしょうか。

【B氏】 また質問します。福岡教授が先ほど、八高はどうしてそうなったかというお話をされました。八高というのは、八番目にできたわけです。一校から始まり、一校は東京、二校は仙台という調子で、八番目にできたわけです。九校は松本ですが、九校という名前が嫌われて松本高校になったという話を聞いています。帝国大学も、総合大学が帝国大学になったと。単科大学は帝国大学と言わないですね。名古屋医科大学のときには、大正一四年の第五〇帝国議会のとときに、名古屋市に総合大学をつくるという建議案が出たのです。それは岡崎高等師範学校や金沢高等師範学校ができる建議案と同じにできていて、しかも題名は「高等師範学校建議案」で、名古屋市に総合大学をつくるということでした。詳しいことは調べていただきたいと思いますが、そういう事情があつて総合科ができて、後々に遅れてしまったということです。そういうことも併せて百年史には記述していただきたいという要望です。

【西山】 これはむしろ吉川さんではないですか。

【司会】 これはご質問ではなくご意見ということで。次に、福岡さんに対するご質問はいかがでしょうか。

【福岡】 今の件でよろしいですか。僕は、なぜ八高か教えてくれという発言をしたのではないのです。つまり、一大学の発展史ではなくて、その大学がどういう大学政策や当時の国策の中で生まれてきたのかという事情を含めて、

解いていただきたいということが本音です。それが抜けてしまうと、単に大学そのものの中の歴史だけになってしまふ。そうではないだろうと。学徒出陣などもそうですが、そういうことをぜひ取り入れて検討していただくといふと思いました。伊勢湾台風も、ぜひやってほしいと思つています。

【司会】 福岡さんに対して、よろしいでしょうか。

それでは、共通というか、全員でなくても複数の方でもよろしいのですが、ご質問、ご意見等、取りあえず自由にお聞きになりたいことを出していただければと思います。

【寺崎】 私から逆に、今日の機会にいろいろな方のご意見が伺えたらと思うことがあります。それはまさに高齢者の心配事なのですが、今日の話の中で、沿革史編纂という作業と、アーカイブズの設立および展示の二つは少し違う議論で、今日の私の質問から少しずれる話なのです。質問とは何かというと、今日お話になったような事業の将来的な人事像どう考えたらよいかということです。

沿革史編纂の場合は、将来的にも人事は補強できるし、補充できるような気がするのです。例えば文科系の学部が、あらゆる大学で全然なくなることはあまり考えられない。どなたか、泣きながらでも委員長に立たれると思うのです。全然いなくなることは考えられない。国立大学の場合ですと、今のように役員体制が非常にはつきりしていますから、どなたかがオフィシャルな責任者になることはあり得る。つまり、編纂事業の方は、人事像の将来について、こうあつたらよいということは言えるけれど、しかし、あまり心配になりません。

ところが、あとの二つは非常に難しいと思うのです。現に、アーカイブズでいろいろなことをしても、人手が圧

倒的に足りない。私学は、場合によってはもつときつい。一人も充てられない。国立の場合も、もつと大変で、本当に一人がぎりぎり舞いをして、いろいろな仕事をしている例が決して少なくはない。京都大学展示館は確かに素晴らしいけれど、あれは一〇年間、西山さんという方がおられたから、今までしつかり充実発展してきたと思うのです。悪いことを言うようですが、もし西山さんに万一のことがあつたら誰が跡を継ぐのか。このぐらいの方が育つには一〇年ぐらいかかると思うので、その間どうしたらよいか。

アーカイブズも同じことです。そういう点で、アーキビストがアーカイブズをやれば簡単なことです。でもそのアーキビストはどこで育つか。私立でいうと学習院大学が今頑張つてコースをつくつておられます。あれ以外にたくさんできるかという、なかなかできそうにない気がします。将来にわたつてどう考えたらいいでしょうか。多くの皆さんが孤軍奮闘していらつしやる様子をよく存じているので、逆にこういうことを心配したくなるのです。

【司会】 先ほど皆さんにご記入いただいた記名帳を見てきたのですが、全国のいろいろな大学から来ていただいているようです。それぞれの大学の状況でもよろしいので、何かご発言をと思うのですが、いかがでしょうか。

【奥野】 金沢大学では資料館ということで、文書館との分離は完全にはしていません。それで一番の問題は、やはりアーキビストをどのようにして養成するか。私自身はもともと理学部の出身ですので、その辺のことを別の方向から見てきました。先ほどの寺崎先生の話は、理系の方からも大学史に積極的に入つてくる必要があると思うのですが、それと同じようにアーキビストは文系だけではなく、あらゆる分野に通じてなければいけないので、一大学でやるのはかなりしんどいと考えています。本来ならば内閣府あたりがもう少しうまくやっていたらればと

思っています。大学はあまり重要でないと内閣府が考えているのであればそれだけのものかと思いますが、今後の政策、大学運営のことを考えると、例えば金沢大学でやるのは無理な話なので、そこは大学として全体でまとまって要望していったり、設立することが重要だと思います。

【西山】 渦中にいる人間として言いづらいこともあるわけですが、今の寺崎先生の問題提起に関して、今の段階で思っていることを申し上げます。

取りあえず、アーカイブズの話と展示の話は一回切って考えてみようと思いました。アーカイブズは国立大学の場合は、公文書管理法という法律が施行されて、一応置かなければいけないことになっていますが、そうはいかない大学もたくさんあることは承知しています。そういうことも踏まえつつ、アーカイブズは一体何のためにあるのか、一番利益を受けるのは誰なのだろうと考えると、資料を公開することが当然の義務ですから、現在および未来の国民が利益を受けますが、それとはまた別レベルの話として、親組織にとって一番役に立つのではないかと、かねてから思っているわけです。

アーカイブズは自らの組織文書をいかに受け入れ、それを整理して公開していくかがメインの業務になります。例えば個人のレベルで言うと、普通の人は、自分の机の周りの片づけはなかなかしないわけです。その日の業務に追われて、一体あれはどこにしまったらうかということ、物を探すことにとっても時間を使われる。これはとてもストレスフルなことですし、仕事の効率上も、とてもよくない。ひどいときには、書いてあった文章は思い出すけれど、どの本だったか分からなくなってしまう、一生懸命、本棚をひっくり返して、結局出てこなかったということがよくあるわけです。

「日本の役所は前例主義だ」と、とても悪いことのように言われますが、それは時代の変化にかかわらず前例を踏襲するから悪いのであって、効率ある業務を行うためには前例がどうであつたか、これまでの議論はどうであつたかを知ることとは、とても重要なことだと私は思うのです。アーカイブズは、親組織にとつてそういう役割を果たすところなのではないかと思つているわけです。

先ほど、少し議論が出かかつたように思いますが、アーカイブズそのものがビジョンを提示したり、何か理念を打ち出すことは期待し過ぎだと思えます。しかし、ビジョンを打ち出したり、業務の効率化のための基盤整備をすることに於いて、アーカイブズは親組織にとつても、とても有益なものではないか。あるいは、そういうアーカイブズでなければいけないのではないかと思つているわけです。そういった観点で何とか力のある方たちを説得できないかなと思つています。

展示は多分、レベルの違う話だと思えます。今回、このシンポのチラシの中に「経営の観点も入れながら」という文言がありました。正直やや引つ掛かる言葉ではありますが、展示や、自分の大学の歴史を学生さんに紹介することや、学生さんだけでなく、卒業生に紹介すること、あるいは、これから大学を受けようとする人に紹介することとは、確かに役に立つだろうと思えます。それはそれで、そういう観点から議論を深めていき、例えばこういう資料を展示しているおかげで、基金がたくさん集まりましたという数字を見せれば、何かの説得力があるのかなと。そんなことも考えつつ、アーカイブズの話と、大学史の資料を使って社会や学生さんに広めていく話は、分けて考えてみたらいかがかと思いました。

【司会】今の点に補足させていただきます。最初に本室の鮎京室長がご挨拶申し上げましたが、今回、大学史編纂

部門、歴史公文書部門の二部門に組織を分けたのです。今、西山さんがおっしゃった、アーカイブズ的な部分については歴史公文書部門が担当する。今日のテーマになっている大学史の研究で、大学史をいかに明らかにしていくか、あるいは沿革史につなげていくかという問題については、もう一つの部門である歴史資料・大学史編纂部門が行うので、こちらの意図としては、公文書、事務文書も整理して公開していくのは当然、非常に重要だが、それを使ってどういう大学史をいかに明らかにしていくかに力点を置いて、このシンポジウムを企画したということです。

ですから、大学アーカイブズの場合は、アーカイブズと言っているけれども、実際は西山さんがおっしゃるような組織アーカイブズと、大学の歴史博物館的な部分が融合して存在しているところがあります。恐らく、寺崎先生は、融合的な現状を踏まえて担い手をおっしゃっているのかなと思いました。ですから、純粋なアーキビストが大学史を研究しているのとは違うのかなと思って聴いていました。お二人がおっしゃっていることは特に対立することではないと思います。

口を出してしまいましたが、今のことについて、何か関連してご質問、ご意見等がありますか。

ご質問用紙の中に大きな質問がありました。欧米の歴史の流れの中で比較検討してほしいというものです。欧米の現況はということ、外国で大学史というものはどのように取り扱われているのか。寺崎先生はいろいろなところでご発言なさっておりますので、寺崎先生が中心になるかと思うのですが、そのあたりはいかががでしょうか。

【寺崎】 そんなによく知っているわけではありません。知っていても一五年ぐらい前の情報ですから、私の頭の中にあるのは古いニュースかと思えます。でも一面では、大きく変わっていないのではないかという気がします。

「又聞き」のことも加えて、大きっぱな比較をしてみると、ヨーロッパ系の大学の場合、どちらかという

資産管理のためのアーカイブズの性格が強いです。非常に地味です。大抵の大学が、五〇〇年、六〇〇年、八〇〇年、九〇〇年と長い歴史を持つているわけです。最初はどこにあつたか、どれだけの教会領を引き継いだか、王侯からどれだけの資料をもらつたか、そのときにもらつた土地の広さはどのくらいかということも含めて、財産管理の要求が非常に強かつたようです。いろいろな国の人から伺つてみて、そのように思います。

もう一つは、ローマ教皇からの勅許状のような、日本で言えば Accreditation ないし Chartersing に関する資料もすっかり保存しているようです。どうも保存というのが強いのです。それが、私が見たところ、アメリカの場合はがらつと違って、日本で言うところと展示のような機能を欠いたアーカイブズはあまりない。どんな小さなところでも資料を集めながら、しかし同時に展示を怠らない。ある大学アーカイブズの専門家の著書に書いてあつたのは、アメリカの場合は第三の新しいミッションをアーカイブズは担つたということです。地域に対する大学の貢献を証する文書が大事だつた。ヨーロッパは権威の証明、マニユスクリプトの厳格な保存が重要だつたが、これにプラスして地域に対する貢献を加えたのはアメリカの大学アーカイブズの新しい動向なのだを書いてあります。これは行つてみた印象と非常によく似ています。あとは個別大学のアーカイブズの歴史になると思いますが、比較してみるとやはり面白いです。

【司会】 他の方で、この件に関して、よろしいですか。

【西山】 大学史研究というよりは、大学のアーカイブズの話で、私の経験した限りの話ですが、京都大学で文書館をつくるときに、少しだけアメリカに行かせていただき、大学のアーカイブズを二、三回らせていただく機会をい

いただきました。ハーバードは特別で、あそこの大学アーカイブズは専任の職員が二四人いて、資料の目録を作る人たち、受入れを担当する人たち、閲覧を担当する人たちなどに分かれている。聞くと、一つ非常に対象として考えているのは卒業生なのです。毎年の卒業生を扱ったアルバムなども全部そろえている。それは卒業生を主な一つの対象として、はつきり言えば、それで寄付をしていただくというような一つの機能を、大学の中で果たしているというお話を伺いました。

それから、京都大学で文書館ができてから、幾つか海外の方と交流する機会があり、特にイギリスの方とは数回会いました。イギリスは、大学によって全然違います。例えばグラスゴーは地域の産業・工業都市ですから、大学の資料というよりは、むしろ地域の工業に関する資料を積極的に集めています。一方では、「うちは組織文書しかやらないのだ」とはつきりうたうアーカイブズもあり、大学によって千差万別だと思いました。

日本にはアーカイブズがない、アメリカやどこそこの国の公文書館の職員は何人で、日本の国立公文書館は四十何人だと言つて、いかに日本が遅れているかという議論は非常によく聞きます。ただ私の印象では抱えている問題はどこも共通で、当局の理解がない、場所がなくて困っている、劣化していく紙の文書は一体どうしたらいいのか困っている、みんな同じことを言っています。組織文書の受入れが大事なのだということを、今、日本の国立大学のアーキビストたちははじめに考えているわけですが、そんなことをはじめにやっているということも、世界的に見て決して劣っているわけではないと私自身は思っています。

【瀬戸口】 今の西山さんの話とも少し関係しますが、専修大学もハーバードやエール大学のアーカイブズと関係があります。というのは、中央大学や明治大学もそうですが、私立大学では創立者が海外留学経験をしている例が多

く見られます。そのため留学生時代の資料を探す際には、海外の大学アーカイブズに問い合わせることになるからです。また今後は私立大学に限らず留学生の問題を扱う際には、日本と海外の大学のアーカイブズが連携していかなければならないことも増えていくでしょう。先々月、専修大学の創立者の一人が、ハーバードとエル大学で学んでいた時期に書き残した日記の複製をアーカイブズに寄贈しました。両大学は卒業生に関係する資料収集を非常に熱心に行っていますので、非常に感謝されました。そういった点でも日本の大学のアーカイブズが果たす役割が当然出てくると思いますので、今後は海外にも目を向けていく必要があると考えています。

【吉川】 あまり海外の話は得意ではないのですが、利用する側から一言付け加えさせていただくと、印象ですが、日本の大学のアーカイブズと海外、特にアメリカの大学のアーカイブズとの大きな違いは、個人文書をどれだけ積極的に集めているかということのような気がします。東京大学は、比較的積極的に集めている気はしますが、例えば名古屋大学でどれだけ個人文書があるかというと、かなり心配なところがある気がしています。それに対して、私が行ったことがあるハワイ大学のアーカイブズは、直接大学に関わらない人のもので、名前を出せば、その文書がぽんと出てきます。それから、今はインターネットで検索すれば、アメリカの大学の個人コレクションのような何とかペーパーというのもたくさん出てくる時代ですので、その違いをどのように考えるかということが一つあると思います。

【司会】 他に大学の事例をご存じの方がいましたら紹介いただいてもいいと思うのですが、いかがでしょうか。

【寺嶋】 今先生がおっしゃったことと関係するのですが、われわれがこれから大いに認めておいた方がいいと思うのは、アーカイブズに関して言うと、ものすごく多様であつていいということです。アーカイブズはこうでなければならぬと思う必要はないと思います。

私はわずかしか行つたことはありませんが、シカゴ大学のアーカイブズは理事会関係の書類は全部保存していますが、それ以外は保存していないと平気で言うのです。理事会に誰かが出した手紙は全部あるのですが、それ以外のものは知らない。かと思うと、スタンフォード大学は、どんな素晴らしいアーカイブズかと思つて行つてみると、小さな部屋が一つあつて、そこには昔の汚れた旗であるうが、看板であろうが、要するに日本でいうと、これはアンソロポロジのような資料だというのが、さまざま置いてありました。そこにいる人に出身を聞くと、「すぐそばのバークリーで、このライバル校の出身です」と言うのです。誠にフラंकでした。一方、ハーバード大学の図書館の中にあるのはかなり本格的なアーカイブズで、全く対照的でした。それでいいということです。

ジュニアカレッジに行くと、オーバードクターの少し上ぐらいの男の子が出てきて、「アーカイブズの部屋はこちらです」と言われた所は、ごく狭い普通の部屋です。しかし、そこに所狭しと展示がしてあります。テーマは何かと聞くと、カリフォルニア湾周辺のベイエリアに対して、われわれは何を貢献したかということ、これがその史料です」と言うのです。一生懸命頑張つている。あれを見ると、大学ごとにプリンシプルを立てて、うちはこれでいくと言つてもいいのではないかという気がしました。

【司会】 外国のことでも構いませんので、自由に問題提起、ご意見等をお願いします。

【佃隆一郎氏】 愛知大学の佃隆一郎と申します。私どもは『愛知大学五十年史』の編纂や愛知大学の大学史の講義に携わらせていただきました。その大学史の講義の参考として、早稲田大学の佐藤能丸先生が大学文化史学を提唱されていて、それを講義で紹介したりしたのですが、大学文化史学の概念は、現在どのくらい普及しているのでしょうか。私は大学史などの講義を行う上で非常に参考になる概念だと思つたのですが。

【西山】 私もよく知らないのですが、大学史をただ一つの大学の話だけで終わらせるのではなく、まちなみや、その周辺のところと関わらせながら組み立てていくというような話ではないかと理解しています。そういう観点は、私も重要だと考えていて、意識はしていますが、大学文化史という言い方で取り上げることにはしていません。

【司会】 『京都大学百年史』に、京都大学キャンパス建築の一〇〇年というのがありますが、あれは関係ないのですか。

【西山】 あれはキャンパスそのものの話です。一般的に、特に国立大学の場合は、大学とそれを巻き地域という視点はとても弱いと思います。京都大学の場合は、どなたかが先ほどご紹介いただきましたが、あの土地をずっと動いていなくて、もともと畑だったところにできて、大学が拡大していく中で、あの周囲のまちができていくというようなことなどもあつて、本当は面白いテーマだと思うのですが、残念ながら、大学とそれを巻きまくちや学生生活を総体的に捉えようという視点は、沿革史編纂や展示や自校教育の中でまだまだ希薄だと思ひます。むしろ、神田の町などで専修大学が他大学との連携もしつつ取り上げておられますので。

【瀬戸口】 確かに私立大学の方が自分たちの学校のある地域との繋がり方について考えることが多いような気がします。それを「大学文化論」という言い方が良いかどうかは別にして、専修大学でもキャンパスツアーだけでなく、まちあるきツアーを学生だけでなく保護者に対して行うこともありまう。学生が四年間住む、または通う地域との関係は、大学にとって非常に大きな問題です。古い写真を見せて「昔はこういうまちだったんだよ」という説明は、神田・生田の両キャンパスでも行います。特に神田地域については、専修大学、日本大学、明治大学、法政大学など歴史を持つ学校が集中していますので、神田という地域の歴史と大学や学生の歴史とを上手にリンクして紹介出来ないかなあという話はよくしています。また明治大学とは再来年度ぐらいに地域向けの講座の中に、「神田の歴史と大学の歴史を知る」といった講座を開講出来ないかという話をしている最中です。そういう意味では、単に大学の歴史を知ってもらうのではなく、大学がその地域にどのような影響を与えてきたのかを知ってもらうことが非常に大切だと思っています。

もう一つ、近年、学生がまちおこし運動に参画する例も増えています。専修大学でも、ある先生のゼミが地域と一緒にまちおこし運動を行っているので、それにアーカイブが協力出来ることはないのか、その方法を探っている最中です。

【司会】 今回、「今、なぜ大学史か」というテーマを掲げて、副題を「その意義と展望」としたのですが、一つは、三〇〇四〇年前は、大学史は学術的な水準があまり高くなかったと言われていたのが、寺崎先生などがご努力された東京大学百年史などをきっかけに、学術的には非常に優秀なものが登場してきて、それが一つのトレンドになり、

ある程度大規模な年史を作る場合には、あのぐらゐの水準は必要というような雰囲気になってきていると思います。その中で、大学沿革史をこれまでどうして作ってきたかを、確認していこうというのが、目的の一つとしてありました。

もう一つは、政治的なこともあるのですが、国立大学の場合は法人化から一〇年たつて、私立大学はこれから非常に大きな厳しい時代に入っていくと思います。この一〇年は大学にとつて新しい段階に入ってきたと思うのですが、そういった変化と大学史をアピールしていくことについて、何かご提言いただきたいのです。最近になって、中教審の答申に、初年次教育で大学史教育を取り入れようとか、大学基準協会で評価の一つの指標として沿革史が取り上げられたということがあります。大学の経営が厳しいから、大学史などやっている場合ではないということではなく、積極的に大学史を取り入れてやっていくべきだという方向もあるかと思えます。そういうことを含んでご提言いただきたいのですが、いかがでしょうか。

【西山】 私の今日のテーマである展示の話に、取りあえずは限定したいと思えます。本来、自分で言うことではないのですが、誰も言ってくれないので申し上げますと、大学史の展示はなくても特に困るものではないのですが、大学にそういうものがあるのは格を示すものではないかという気がするのです。

今日は話の中で申し上げるべきだったのですが、展示を作る場合の基本は、対象は誰かということですが、対象は、大学に来られるお客さまに、二〇〇三〇分程度で大学の歴史の概略をざっと見ていただくつもりで、文章などを作りました。そうすると、先ほど入場者の中で一番多いのは、高校生や受験生だと申しましたが、多分、彼らには少し難しいだろうと思います。言葉の使い方や、そもそも個別大学の歴史などはほとんど知らない彼らですから、多

分、中身は難しいと思います。しかし、この大学は自分のところの歴史をそれなりに大事にしている大学だということ、展示の内容や展示室の雰囲気から何となく察してくれるのではないかと思っています。そういうことは結構大事な要素だと思っております。

少し話はそれますが、作り手からすると展示は一種の麻薬のようなもので、やると結構楽しいことが多い。何が一番楽しいかという点、見にくる人の反応がビビッドに分かることです。感想を伺ったり、「こんなふうでしたよ」と言ってくださるので、直接分かる。これは沿革史では味わえないものです。あるとき、昼休みに知り合いの図書館職員が来てくださり、「来てくださっているんですね」と話をしたら、「時々来るのですよ。ここに来ると落ち着くんですよ」とおっしゃいました。これは私にとって、とてもうれしい言葉でした。

大学史の展示はその大学の格を示す一つの有力なものではないかと思っています。大学がいかに自分たちを大事にしているかを分かってくれる場ではないかと思っています。

【吉川】 先ほどのお話の中でも少し触れたのですが、大学史は、特に昨今の大学政策動向の中で、それをうまく乗り切ったり、うまく対応したり、あるいは対抗したりというような場合に、足がかりを与えてくれるものだと思います。法人化以降、国立大学は振り回されればなしで、例えば昨年もミッシェンの再定義というのがあり、部局ごとに書類をまとめろ、一番最初に沿革のことを書けと言われて、やりかけたのですが、ある時期まで『五十年史』の通史の記述を見れば、講座の移り変わりが全て分かり、非常に役に立ちました。

ところが、『五十年史』の後が分からない。教授会の記録も全部引つ張り出したのですが、隣の独立大学院の国際開発研究科ができたときに、教育学部が教官ポストを出したのか出さなかったのかという、すごく重要なことす

ら分らない。結局、堀田さんのところへ行つて資料を見せていただいたのです。そういう意味では、アーカイブがとても役に立ちました。そのように、いろいろ振り回されつばなしのところ、うまく対応するための一つの手がかりだし、大学自身で改革していく際に、自分たちの大学は今どういう状況になっているのか、今どういう形であるのかを確かめるための非常に重要なものだと思います。

【瀬戸口】 寺崎先生が、沿革史の問題や展示の問題を提起されたかと思いますが、いずれにせよ、そうしたことを行うためには、資料を集めて保存し、整理した上で、すぐに取り出せるようにするという作業が必要になります。少なくとも国立大学は「公文書館管理法」が施行されたからという理由でアーカイブを置くことが出来ませんが、私立大学の場合はその法令は「うちには関係ないから」と言うことも出来るわけです。ではそういった中で、私立大学においてどのようにすればアーカイブを構築出来るのかというと、先ほど西山先生がおっしゃった通りで「それがあれば便利なんだよ」と言うしかならないと思います。アーカイブが構築されることで、「あなた方の仕事が楽になるんだよ」という理由づけが私立大学には一番良いのではないかと考えています。

また先ほど、専修大学は五年に一度のペースで沿革史を作っているという話をしましたが、それはそれで良い面もあります。五年に一度の期間で記念誌を編纂すると、これまで集めた資料は分散したり無くなったりしません。これが一〇年や二〇年、もつと期間が空くと、その時々を集めた資料の多くがどこにあるのかわからなくなってしまうことをよく聞きます。専修大学における一九六〇年以降のほぼ五年置きの記事誌編纂は、その都度新たに集めた資料も含めて継続的に資料を保管する体制を維持する役割を果たしてきたとも言えるわけです。そのため学内や課内を探索すると色々な資料が出てくるのですが、逆に専修大学には何が残っているのかを、外部にも内部にもき

ちゃんと知らせていかなければならない。これが今後の大きな課題になってくると考えています。名古屋大学のよう  
な旧帝大と専修大学のような中堅私大とは、同じ土俵で話が出来る部分は少ないかもしれませんが、アーカイブ  
の構築が、何かの役に立つという話は共通するのではないかと考えています。

【寺崎】 今後、もし名古屋大学で、次に年史編纂をお始めになるときは、大学の中にはいろいろな才能の人がおら  
れるので、それをどんどんお使いになるといい気がします。

東京大学ではどのようにしたかという、自分たちができないテーマがあるのですが、一番できなかったのは、  
帝国大学会計制度の変遷と大学の財政でした。これはやれと言われても、すぐには分からない。国立大学財政制度  
史などというのはありますが、そんなものをいくら読んでも、大学の財政歴史は分からない。「これは教育財政をやっ  
ている人がいるのだから、その人に全部任せませんか」と言うと、そのときの委員長の土田さんはとても度量の大  
きい方で、「では、その方にしましょう」ということで、頼みました。その方は羽田貴史という方で、今は別のこ  
とで活躍しておられますが、羽田さんは福島大学で勤務しておられる執筆委員でした。お礼は全部原稿料で払うこ  
とにして、結局、全一〇巻の財政のところは全部、羽田さんが元原稿を書かれました。

また、紀要を発刊したところに、編集委員長を誰にしようかということになって、第三号からの編集委員長は、私  
ははつと気が付いて、理学部の熱心な地質学の先生にお願いしたのです。その先生が理学関係の地質学のところで  
出ていらつしやつたので、その方に「お願いします」と言ったら、「分かりました」と言つて欣然と引き受けられた。  
先生に「何か論文をお書きになりませんか」と言うと、「書くつもりです」と言われるので、「何を書かれますか」  
と聞くと、「『東京大学の基礎』というのを書きます」と言うのです。東京大学の基礎とは何だろう、歴史論文かな

と思つたら、本当の基礎の話でした。加賀屋敷の下がどうだったとか。この論文のおかげで、法学部のあの教室から出てきたところの蛇口をひねると、なぜ夏でも本当においしい冷たい水が出るのかが分かりました。それは井戸の地下水だったのです。そんな地下水がどうして出るか。文字通り、東京大学の基礎があつたからなのです。そんなことも面白かったです。

それと、もうそろそろ最後の巻が出ようというところに、時計台の上から見ているら、副委員長をやつておられた建築史の稲垣栄三先生が、助手の女性を一人連れてカメラを持って写しているのです。建築史の先生となると本格的に写真を撮るものだなと思つていたら、それは稲垣先生が口絵に載せる時計台の写真を撮りにきておられたのです。できた写真は『通史編三』の口絵にあります。思い出したら見てください。安田講堂のあらゆる写真の中では最高だと思います。空がいいのです。聞いてみたら「いい天気でしたからね」と言われるのです。いい天気というのは、私たちの言ういい天気とは違うのです。空の色がどうなっているかをちゃんと見ているわけです。いい天気というのは、私たちにいろいろな使える才能がある。それを存分に使つたらいい沿革史ができるという気がします。

【福岡】 日ごろやっていることが少し違うものですから、大変興味深く聞かせていただきました。沿革史を作ることにアーカイブズをきちんと確立していくことと、展示とは相対的に区別されている課題で、一緒にたにして、ここでうまく統合的にやろうと思うと、かえつてうまくいかないのではないかと気が持ちをだいぶ強く感じました。それから、専修大学は中堅とおっしゃいましたが、われわれから見れば巨大です。多くの弱小私学は、人を割くのも大変です。定年間際の、あの人をそこで面倒を見てくれという話になりかねないのが実態で、専任教員を割くなどということはとてもできない。そういう実態の中でどうやっていくか。私はリタイアですから何も責任はない

けれど、とても気になると思いながらお聞きしていました。

もう一つ、公文書という言葉が持っている感覚なのですが、歴史学という立場からすると、公文書と私文書とがあります。しかし、公文書というのは私文書を含む、公のものだという考え方で資料を捉えていくとすれば、たくさん私の資料を集めきらなければいけない。また、オーラル・ヒストリーは現代歴史学の一つの柱になっているわけですから、そういうものの集積。それから、批判的検討です。日記だからいいというものではないのです。昔のテレビコマーシャルで、『家まで送っていった』と日記には書いておこう』というのがありました。だから、日記だから全部正しいとはならないのも当然です。史料批判は相当大変です。特に沿革史のように、その人たちの思いが重なる場合には、そういう問題が必ず出てくる。

それから、自治体史で言いますと、今、彦根市史で大問題が起こっているのです。彦根市史の最後の段階で市長が介入して、おれのところまで書けと。その辺のことは幾つかの自治体でもちよこちよこ出てきているので、大学でも相当きちんとしていかなければいけないと考えました。民間に膨大にある資料をこれから先どうやってやるのだということも考えなくてはならない。

私は愛知県史を二〇年以上ずっとやってきていて、あと五年で終わるのですが、その後、どうなるかの見通しが全く立っていない。あの集めた膨大な資料の中には、恐らく大学史にも関わるようなものがたくさんあるのですが、そういうものをインターカレッジ、市民との協働、学産官民とか。僕は「官」という言葉は大嫌いで、あれは「行政」や「自治体」と言った方がいい。「産」も、産業が問題ではなくて企業が問題なのです。そういうことも含めて考えていただくときに、大学史の担当の人は、そのときの核になれる人たちだという思いを新たに、敬意を表したいと思います。

【司会】  
ありがとうございました。これで討論を終わらせていただきたいと思います。